

令和6年度 長崎市平和式典 派遣者報告書



船 橋 市

目 次

1. はじめに	1
2. 平和都市宣言文	2
3. 派遣スケジュール・行程表	3
4. 派遣者名簿	4
5. 派遣場所の報告	5
6. 派遣者の報告（感想文）	11
7. 事前説明会及び市長報告会の様子	23
8. 平和祈念式典報告	24
9. 平和祈念式典式次第	26
10. 長崎平和宣言	27

は じ め に

昭和20年8月6日に広島、9日には長崎に世界で初めて原子爆弾という兵器が使われ、多くの尊い生命が一瞬のうちに奪われました。あの日から79年が過ぎました。

いま、戦争体験、被爆体験をされた方が少なくなっていく中で、戦争や原爆の悲惨さ、世界の恒久平和がいかに大切かということを、次世代にどう伝えていくかが大きな課題になっています。

船橋市は、昭和61年12月に、世界の恒久平和を願うとともに、核兵器の廃絶を目指して「平和都市宣言」を行いました。これを機に、毎年、平和の集いや平和写真展、そして広島や長崎で行われる平和式典への市民の派遣などの事業を通して、市民の皆様と一緒に平和の尊さについて考える機会を作るという取り組みを行なっています。

平成5年から始めたこの平和式典派遣事業も今回で30回目となり、今年長崎市に派遣した6人を含め、これまで延べ280人の市民を派遣してきました。

この報告書は、今回長崎へ派遣されたこれからの船橋を担っていただく若い世代の皆さんが、現地で実際に肌で感じた貴重な体験を取りまとめたものです。市民の皆様には是非御覧いただき、平和の尊さ、戦争の悲惨さについて語り合っていただくことで、平和式典派遣事業の意義はさらに深まるものと考えています。

船 橋 市

平和都市宣言

船橋市は、現在人口五十一万を擁する首都圏有数の中核都市に成長し、第二の飛躍期を迎えている。そして、「活力ある近代的都市」を市政の目標に掲げ、より豊かな福祉社会実現のため懸命な努力を続けているところである。

しかし、郷土船橋の限らない繁栄は、日本の安全と世界の恒久平和なくしては望み得ないものである。

私たち船橋市民は、世界の恒久平和を願い、我が国の国是である非核三原則を遵守し、平和を脅かす核兵器の廃絶を目指して最大の努力を払うことを決意し、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和六十一年十二月十九日

船橋市

《派遣スケジュール》

4月	派遣者公募
7月24日	説明会 ～行程説明、自己紹介等～
8月8日～10日	長崎市派遣
8月29日	市長報告会及び平和式典派遣者報告準備
10月12日	平和式典派遣者報告（「平和の集い」において）
12月	報告書完成、公表

《長崎市平和式典派遣 行程表》

8月8日 （木）	JR 船橋駅（集合）－羽田空港－長崎空港－現場学習（原爆落下中心地、浦上天主堂など）－原爆資料館・祈念館－ホテル
8月9日 （金）	ホテル－平和祈念式典（平和公園）－被爆体験講話（長崎新聞文化ホール）－長崎歴史文化博物館－ホテル
8月10日 （土）	ホテル－長崎駅－長崎空港－羽田空港－JR 船橋駅（解散）

《派遣者名簿》

	氏名	性別	学年等	担当
1	あおき ふたば 青木 二葉	女	高校1年生	班長
2	みやぎき ふみか 宮崎 芙実香	女	中学3年生	副班長
3	やざわ るい 谷澤 瑠依	男	中学3年生	平和式典報告担当
4	いちかわ はると 市川 陽大	男	大学2年生	報告書担当
5	もりい こうすけ 森井 康介	男	中学1年生	写真担当
6	ひらやま あきら 平山 晃	男	原爆被爆者の会	



(令和6年8月9日 長崎市 平和公園にて)

《派遣場所の報告》

平和公園



1945年8月9日11時2分、長崎に原爆が投下されました。核兵器によって多くの無実の人々の命が奪われました。平和公園は、そのような悲惨な状況をもたらす戦争を二度と繰り返さないという誓いと世界恒久平和への願いを込めて作られました。また、平和公園は5つの区分に分かれた総合公園であり、世界平和と文化交流のための記念施設として国内外の多くの人々に親しまれています。実際に、様々な国の方々が多く訪れていました。

私たちも多くの原爆による爪痕を実際に見て触れて感じることができました。79年たった今も時代を超えて、戦争と原爆の悲惨さを感じることができ、平和の尊さを学ぶ場として必要不可欠な場所だと感じました。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

79年前、長崎に投下されたたった一発の原子力爆弾によって一瞬にして街は廃墟と化し、多くの尊い命が奪われました。この出来事を忘れず、平和の尊さ・大切さを後世に語り継ぐとともに、世界中の人々に被爆の実相と原爆の悲惨さを訴え続けるため、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は毎年8月9日に举行されてきました。



あの日から79年、原爆死没者は198,785名になりました。これだけ多くの方々が、たった一発の原爆によって亡くなられたことに衝撃を受けました。また、今回の式典では誓いや宣言の中で、日本の核兵器禁止条約への署名が言及されており、世界で唯一被爆した日本が先導していかなければならないと感じました。平和を願う場として、原爆を風化させないため、これからも式典を続けていかななくてはならないと考えます。

平和祈念像(平和公園内)



平和祈念像は、平和公園内の願いのゾーンにあります。平和祈念像は、長崎市民の平和への願いを象徴するものとして、長崎出身の彫刻家によって作成されました。この像のポーズには、大きな想いが込められており、天を指す指は上空から落ちてきた原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、軽く閉じされた瞼は原爆犠牲者の冥福への祈りが込められています。

実際に像を目の前にすると、その大きさと凛とした佇まいに圧倒されました。平和が水平に伸ばした左手のように世界中どこまでも広がってほしいと強く思いました。

平和の泉(平和公園内)



水を飲むことができないまま、または飲むことができて汚染された水しか飲めなかった方々のために、いつでもきれいな水が飲めるようにと、建設されました。たった一発の原子爆弾によって、多くの尊い命が奪われました。被爆者の多くは原爆により体内まで焼けただれ、水を求めてうめき叫びながら亡くなったのです。また、平和の泉の正面には被爆当時9歳だった少女の手記を刻んだ石碑が設置されています。

「のどが渇いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました
—あの日のある少女の手記から—

原爆の悲惨さを鮮明に感じさせられ、原爆の無差別な残虐性に悲憤の念を抱きました。

長崎原爆落下中心地(平和公園内)



長崎平和公園内には、原爆落下中心地標柱として黒御影石の碑が建っています。そのちょうど500m上空で原子爆弾は爆発し、ほんの一瞬で多くの尊い命が奪われました。石碑には原爆殉難者名簿が安置され、その側面には今までに原爆によって亡くなった方々の総数が記されています。この数は、毎年更新され続けています。また、園内には被爆当時の地層が保存されており、倒壊した家の残骸、家具、回収の難しい小さな遺骨が今もなお市内の広範囲に埋没したままである現状を一部見ることができます。ほかにも、浦上天主堂の一部が園内に移設されています。

この場に足を運ぶと、実際に79年前にこんなにも悲惨な出来事があったことを再認識させられ、原爆がいかに恐ろしい兵器であるかを考えさせられました。また、焦土と化した地に、今は青々とした緑が多く育っていることに命の尊さを感じました。

長崎原爆資料館

長崎原爆資料館は、1945年8月9日11時2分に遡って、その世界に入り込み展示を見学することができる施設になっています。展示室には、被爆による惨状だけでなく、原爆が投下されるに至った背景、核兵器の歴史など、原爆に関する展示があります。映像や写真が多く展示されており、当時の惨状を詳細に見て学ぶことができます。展示品の中にはボロボロになった幼児の服や、熱で手の骨とガラスがくっついているもの、家族を失った人の俳句などがありました。

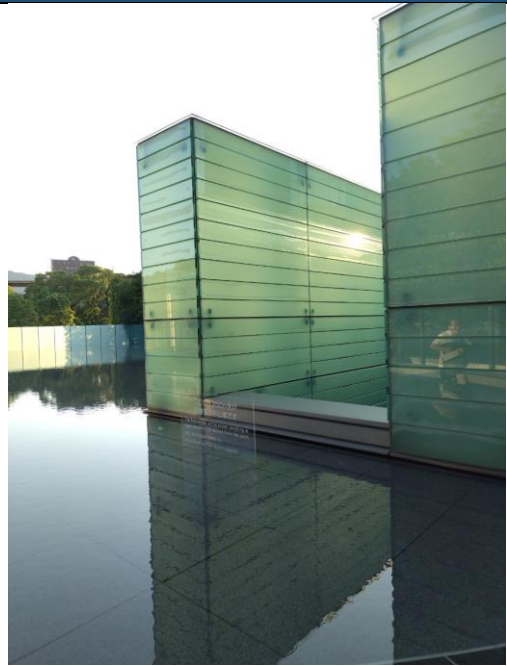


目に見える傷だけでなく心の奥に刻まれた痛みや悲しみを感じ取ることができました。そして、原爆の破壊的な力が与える傷跡は物理的なものだけでなく、深刻な心理的傷跡も残すことを再度実感させられました。

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

原子爆弾の投下によって亡くなられたすべての方々への追悼と平和祈念を行う場として建設されました。平和祈念館には、原爆死没者の方々の氏名と遺影が今も収集・登録されており、追悼空間前室にて閲覧することができます。追悼空間には原爆死没者の氏名が登録された名簿が納められています。また、被爆体験記集（黒本）を自由に閲覧することができます。被爆者一人一人の背景や心情を知ることにより一層戦争、被爆を身近に感じることができます。

被爆した方々の被爆当時の心情や、被爆後にどのような想いで生きてこられたのかを知ることができました。平和を考えるうえで一度は必ず訪れるべき場所の一つだと考えます。



浦上天主堂



原爆の爆心地から500メートルほど離れた丘の上に建つ浦上天主堂は現在再建され、被爆からの復興のシンボルとしてそびえ立っています。浦上天主堂は、爆風と熱線によって全壊しました。平和公園内の原爆落下中心地近くに移設された浦上天主堂の一部を見ると爆心地側の外壁は熱線によってレンガが黒く焼けたっており、原爆の恐ろしさを実感させられます。また、重さ50tもある鐘楼が爆風によって天主堂の左下に流れる川まで吹き飛ばされ、今もそのままの場所に残されています。同じ宗教を信仰しているはずのアメリカによってこんなにも悲惨なことがもたらされたということを知ってもらうために今でも浦上天主堂内には被爆したマリア像が展示されています。

被爆した浦上天主堂の一部を目の当たりにし、原爆の残忍さを強く感じました。後世にバトンを繋いでいくためには、被爆遺構の保存が大切だと考えます。

如己堂（長崎市永井隆記念館内）

永井隆博士は、日々の放射線医学の研究と診察の影響で白血病にかかり、余命三年と宣告されていました。そんな中、原爆に遭いました。病身で大けがを負った身でありながら、負傷者の救護に奔走しました。如己堂は、原爆で無一文となった浦上の人々やカトリック信者仲間達の厚意によって、博士のための新しい住まいとして建てられました。二畳一間の建物になっています。この家で永井博士は17冊もの著書を書き上げ、恒久平和の実現を訴え続けました。

原爆によって妻を失い、病床に侵される自身と子供2人を残して先立つことなど、多くの苦悩の中で平和を願い活動进行する博士の姿から、不屈の精神や人間としての生き方を学ぶことができました。



山里小学校



山里小学校元山里国民学校は爆心地から700メートルの場所にあり、鉄筋コンクリート製の三階建ての校舎でした。原爆によって在籍児童数1581名のうち約1300名が亡くなりました。現在の山里小学校内には永井隆博士と助かった子供たちの「あの子」の死を哀しむ想いと平和を願う心によって、「あの子らの碑」が作られました。また、今でも永井隆博士によって作詞された校歌が平和を願って歌い継がれています。小学校内の原爆資料室では、被爆資料を見学することもでき、被爆した瓦などが展示されています。

原爆によってなんの罪もない多くの子供たちの命が奪われてしまったことに言葉を失いました。

原爆によってなんの罪もない多くの子供たちの命が奪われてしまったことに言葉を失いました。

長崎歴史文化博物館

戦争や原爆の歴史だけでなく、長崎に関する歴史を学ぶことができ、昔から海外との交流が多かった長崎の独特な変化を遂げた文化に触れることができます。教科書で見たことがあるような解体新書や長崎通史絵巻などが展示されていました。モールス信号や活版技術などを実際に体験することができる展示もあり、見るだけでなく触れて感じて学ぶこともできます。



《派遣者の報告（感想文）》



紡がれてきた平和への願い

青木 二葉（高校1年生）

「あなたは、ただ、世界を楽しむだけでいいのです。（中略）そのために、あなたは生まれたのです。」これは私の好きな命の誕生の難しさや尊さを書いた本の一節です。長崎原爆資料館を巡っていく中でこの言葉が何度も頭をよぎりました。この人達もこう生きるべき一つの命だったのに。死傷者約15万人の中で、原爆の犠牲になるために生まれた人なんて一人もいないのに。これからやりたいことや楽しみたいことがたくさんあったであろう真っ黒な少年を前にして、私は戦争の残酷さを痛感しました。

小さい頃、「はだしのゲン」で描写されている原爆投下直後の人達を見て、とても胸が苦しくなり、読むのを何度も諦めました。熱傷を受けて火ぶくれ、怒っているのか悲しんでいるのか、目、鼻、口はどこにあるのかも全くわからない14歳の男の子の顔の写真を観ました。「はだしのゲン」は漫画の中だけの話ではなかったのです。その写真は、日本中に「ゲン」が存在した事実から目を背けてはいけないということを、私に訴えていました。

被爆者の方々が少なくなっている今、生の声を聞ける最後の世代である私たちが戦争の生んだ悲しみを伝え、平和を守り続けていく大切さを訴えるという重要な役割を担っています。79年前から強く願い紡がれてきた平和が、今日の私たちの生活を守ってくれています。世界中の人々が「ただ、世界を楽しむためだけに生きる」ことができる平和を、私は心の底から願い続けます。



（令和6年8月8日 平和公園内には世界各国から寄贈された平和祈願の像が点在）



時計の針を進めるのは

宮崎 実香（中学３年生）

１９４５年８月９日１１時２分、美しい長崎の街に原子爆弾が投下されました。

私は原爆について多くの知識がなかった時でも原爆は恐ろしいものということだけは知っていました。おそらく多くの人もそうではないでしょうか。しかし、なぜ多くの人が知っているのでしょうか。私は派遣事業を通して気が付かされました。被爆者など多くの方々が伝えてくださっていたからです。

特に私が心に残って、皆さんに伝えたいことは三つあります。

一つ目は街に残った傷跡についてです。今となっては美しく蘇った異国情緒あふれる長崎の街。しかし、この街には防空壕や爆風によって首が飛ばされた像などが残っています。地面には小さな遺骨や遺品がそのまま埋め立てられています。思い出すことも苦しいあの一瞬のことを私達に伝えるために残してくれています。被爆者の方々の強い想いを感じました。

二つ目は平和案内人やボランティアのガイドの方々についてです。高齢の方から私と同年代と思われる学生の方々まで街の案内をしていました。外国からの観光客の方も多かったので英語を話されている案内人の方もいました。年齢関係なく長崎の方々はみんな原爆について語り継いでいます。

三つ目は「あの子」という詩についてです。作者は永井隆さん。自身も被爆し、白血病を患いながらも多くの詩や本を書き続けました。「あの子」という詩は歌曲になり平和式典でも歌われていました。一節一節の最後に「ああ あの子が生きていたならば」とあります。この一文だけで何万ものあの子の人生・これからの物語を奪った原爆の無残さ、あの子が生きていたならばと悲しむ遺族の方々の想いが伝わりました。

被爆者の方々が必死に伝えてくださったことを感じて、考えて、受け取り伝えていかなければ平和は手に入りません。１１時２分で止まった時計、今までは被爆者の方々が進めてきてくれました。世界のどこでも、針が二度と止まらぬよう針を進め続けるのは、まぎれもなく私達です。



(令和6年8月8日 浦上天主堂にて 浦上天主堂旧鐘楼)



原爆の恐ろしさ

森井 康介（中学1年生）

僕が今回の長崎派遣事業で印象に残ったことは2つあります。

1つ目は、被爆者の池田さんから伺ったお話です。

池田さんは6歳で被爆したそうです。当時池田さんは病気のお母さんと大学病院で暮らしていました。原爆投下時、池田さんは病院にいましたが、突然外が輝き、すぐに気絶してしまったそうです。しばらくして、目が覚め周囲を見渡すと看護婦さんが居ました。バケツいっぱい血を被ったような状態で、警防団を呼んでくるよう言われ、池田さんが外に出ると中庭は火の海で人が何人も亡くなっていました。眼球が飛び出し、歯が丸見えで、腹がパンパンに膨れ、体中が真っ黒だったそうです。少し移動すると、生存者がいました。生存者に水を汲みに病院に行くと、道中人が倒れていました。水をあげるとごくごく飲み「はあ」とため息をつきました。また水を汲みに行くと、先ほど水をあげた人は亡くなっていました。

この話を聞いて、原爆とは僕の想像以上に悲惨で凄惨なものであると思いました。池田さんは現在85歳で、このようなお話をもう10年とできないとおっしゃっていました。僕は、この話を胸に刻んで、身近な人に戦争の悲惨さ、二度と繰り返してはいけない、ということを伝えていきたいと思います。

2つ目は、核兵器についてです。

当時は、上空500メートルで爆破し、直径300メートルの火の玉になったと言われています。表面温度が6000～7000℃、中心の温度は数百万℃に達します。風速は最大440m/sの爆風が発生しました。500メートル以内の屋外で放射線を浴びるとほぼ即死すると言います。とても凶悪です。

しかし現在、核兵器はさらに力を増しています。一発で関東地方全域を攻撃できるほどの力を持ち、それが世界に約10,000発あると言われています。そんなものが爆発すれば何十万人もの人が犠牲になります。なんとしてでも防がなければなりません。

戦争については、ずっと「歴史上のできごと」と捉えている自分がいました。しかし、実際に長崎に行って、被爆者の池田さんからお話を聞いて、戦争を過去の出来事の一つにせず、戦争のない世の中を作っていくため、できることから取り組んでいこうと思います。



(令和6年8月8日 長崎原爆落下中心地「下の川」にて)



平和式典派遣事業を通して

市川 陽大（大学2年生）

先日、長崎平和式典派遣事業において戦争に関する様々な学習をさせていただきました。これらの学習の中で、印象に残った平和祈念式典、原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、被爆体験講話の四つに触れようと思います。

まず、平和祈念式典では、長崎市長や被爆者代表の三瀬さん、長崎市議会議長などが核兵器禁止条約への日本の加盟を強く訴えていました。日本は戦後、非核三原則を掲げ核兵器を保有していませんが、アメリカの核の傘に守られている現状を見ると、核を保有しているのと同じではないかと私も以前から感じていました。国際情勢が複雑であることは理解していますが、世界に対して、唯一の被爆国である日本が条約に加盟し、積極的に平和活動を進めていく必要があるという考えに強く賛同しました。また、今年はイスラエル不招待に伴い、日本を除くG7の大使の方々が欠席しましたが、ぜひこの場に参加していただき、平和について考える時間をとっていただきたかったです。

次に、原爆資料館では、原爆投下前後の長崎地形模型を見ました。一発の原爆によって直径4キロメートル四方が完全に破壊された様子に驚愕しました。実際に長崎市を歩いてみると、山と山の間がかなり遠く感じ、それだけの広さを一発の原爆によって更地にされていることを実感でき、衝撃を受けました。現地を訪れたからこそその貴重な経験をすることができました。また、被爆した幼児の服なども展示されており、人々の生活を豊かにし助けるための科学技術によって、無差別に多くの罪のない人々の命が奪われてしまったことに強い憤りを感じました。

そして平和祈念館では、今もなお増え続ける原爆死没者の方々の名簿の掲示があり、写真と名前が映像として流れていました。19万8785名もの方々がたった一発の原爆によってなくなったという事実とその方々のことを考えると涙が込み上げてくる思いでした。

さらに、被爆者の体験談が記された「黒本」の中にある15歳の少女の話の朗読も聴きました。戦争下でも普通の日常を送っていた少女が、たった一発の原爆によってその日常を一瞬で奪われたことを知りました。特に「私たちが何かしたのでしょうか、兵器のほんの小さいねじを作っていただけの私たちが何

かしたのでしょうか。」という言葉が心に深く残りました。この言葉から、戦争の無常さ、悲惨さ、原爆の非人道性を再認識させられました。

最後に、被爆体験講話では、当時6歳だった池田さんのお話を伺いました。原爆で肌が炭化してしまった人に水を差し出したエピソードが特に印象的でした。その方が水を飲んで感謝の言葉も感想もなく、ただ大きくため息をついてその数分後に亡くなったことを伺い、言葉では表現しきれない深い感情が込み上げてきました。当事者の方から直接お話を伺うことで、その方のご体験の背景にどのような心情があったのかを知ることが出来ました。私にとって大変貴重な経験であると同時に、心に強く残りました。

今回の派遣事業で、戦争、原爆についての様々な歴史、記憶に触れることができ、本当に貴重な経験をさせていただきました。戦争は国や敵というマクロな視点で見えてしまいがちですが、実際は国でもなく、敵でもなく自分と同じ人間がそこに存在し、その人たち一人一人に複雑な背景が存在していることを理解しなくてはならないと思いました。決して武力に頼らず、マクロではなく、ミクロな視点で相手を思いやること、相手を理解しようとするのが世界平和の実現に必要不可欠だと私は本事業を通して考えます。



(令和6年8月8日 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館にて 原爆死没者名簿が安置されている)



思いを受け継ぎ 語り継ぐ

谷澤 瑠依（中学3年生）

長崎へ行き、原子爆弾は罪のない人々の尊い命を、何気ない日常を一瞬で破壊した残酷でこの世にあってはならない非人道的なものだと強く心に感じました。

長崎原爆資料館や山里小学校原爆資料室、浦上天主堂などを訪れ、原爆投下直前まで当たり前のように使われていた品々や熱線を浴びて原形をとどめていないビンややかん、黒く変色した建物や聖像の数々を見る度、僕は心臓が強く締めつけられ、目の前の真実に背を向けたくなるような気持ちになりました。話を聞かせてくださった被爆者の方々は当時、まだ5歳程度だったのにも関わらず原爆の閃光や爆風、その時自分がどこにいて、何をしていたか、79年経った現在も鮮明に覚えていて、原爆が本当に残酷なものだったと感じました。

僕は長崎にいた3日間で平和案内人の上原さんのお話が強く印象に残っています。上原さんは初めに核兵器を保有している国や、保有数、現在の原子爆弾の威力などを教えてくださいました。ロシアとアメリカの核保有数が6500発、5000発と、他国に比べ圧倒的に多く、ほかにも中国や北朝鮮が核兵器を保有していることを知りました。また世界全体でみると13000発の核兵器があると知りとても驚きました。また、広島、長崎に投下されたりトルボーイとファットマンの数千倍もの威力の原子爆弾が開発されていて関東が一発で壊滅すると聞いたときは恐怖さえも覚えました。今、この瞬間もたった一つの原因によって自分を含める多くの命、かけがえのない生活が一瞬で奪われるかもしれない、と思ったときは不安と悲しみと恐怖が混ざったような気持ちでいました。

少しでも早く原子爆弾がこの世からなくなってほしい。唯一の被爆国である日本では、多くの人々がそう思っていると思います。核兵器廃止条約が作られたのに、日本はまだ条約に調印していないという事実に対し僕は憤りを感じています。アメリカの核兵器の傘に守られているということを日本は理由にしていますが、日本が動かない限り、原子爆弾はなくならないのかなと思います。唯一の被爆国である日本が率先して核廃止を呼び掛ける必要があると僕は心の底から思いました。

僕が話を聞いた長崎の人々は口をそろえて、「長崎で見たもの、聞いたもの、感じたことを語り継いでほしい。」と言っていました。被爆者の平均年齢が85歳を超えた今、子どもがいろんな被爆者の体験と気持ちを受け継ぎ、この世から被爆者がいなくなったとしても、核がなくなってほしい、世界平和が実現してほしいという思いを途絶えさせない。それが被爆地に足を運び多くのことを学んだ僕の使命であると思っています。



(令和6年8月8日 平和公園近くの防空壕跡にて)



その日の長崎は

平山 晃（船橋市原爆被爆者の会）

その日の長崎は、この世のものとも思えない、「これは地獄か」というほどの世界だったと言います。爆発中心部の生物は一瞬にして蒸発し、その周りは瀕死の重傷者で溢れ、歩けるものは水を求めて彷徨い、あらゆる水場で折り重なるように亡くなっていました。

この中で、自らも被爆しながら、被爆者の治療・救済をした永井隆博士がいらっしゃいました。長崎大学で、放射線医学の治療と研究を続けていました。原爆について第1級の証言記録者であると同時に、その生涯をかけてキリスト教徒として平和を希求し、人類愛に溢れた方でした。当時の昭和天皇もお見舞いに来られたし、あの三重苦で有名なヘレンケラーも訪問していました。

博士は私が6歳の時亡くされました。年齢43歳、凄い人だったと思います。

今回、船橋市の『長崎市平和式典派遣事業』により『長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典』に参列いたしました。

5人の若者と出発してすぐの階段で、「荷物持ちましょう」と言われ、驚きました。また、階段でバランスを崩すとすかさず「大丈夫ですか」と心配してくれました。

私は昭和20年8月9日、ピカドンの落ちた夜に生まれ、「若く見えますね」と言われ続けて79年が経ち、すっかり年寄りとなったようです。我々被爆者の平均年齢は85.58歳となり、もうあまり時間が無いようです。

我々被爆者の願いは一つ、『核の廃絶』

長崎の高校生平和大使の言葉です。『微力だけど無力じゃ無い』

諦めず、着々と進めてゆきたいと思います。

子供の頃、父と一緒に墓参りに行く時には、電鉄（長崎電気鉄道株）の松山駅から爆心地へ行き、永井博士の如己堂で礼をして、それから墓へ行く、というルートをいつも辿っておりました。

一番古い記憶では、爆心地は歪んだ鉄骨のゴミ捨て場所のように思えました。そのすぐそばには小川があり、いつも遊ぼうとしていましたが、母は異常なくらい川遊びを嫌いました。これは、後から気付いた事ではありますが、爆心地は全てのものが吹っ飛んだ広場であったため、被爆した人々が押し寄せ、水を求め、折り重なって亡くなっていた場所だったそうです。

当時は公衆浴場でありましたので、半身ケロイドで焼けて赤くなった人や顔が半分赤くなった人がそこら中にたくさん居ました。

船橋原爆被爆者の会には、前会長で広島被爆者、岩佐幹三さんのお話を小学校の生徒さんが絵にして、紙芝居にしたものなど、わかりやすい資料もありますので、これもいつかご披露できればと思います。

今回、自らすすんで参加してくれた、5名の若者。

我々の代で『核の廃絶・戦争の無い世界』が成し遂げられそうありません。しかし、残された少しの時間ではありますが微力でも進めていきたいと思えます。あなた方もこの暑かった夏、炎天下の中で、その目を見た長崎での体験を、共に伝えて行って欲しいと思えます。我々は協力を惜しみません。

昭和61年に「平和都市宣言」をした船橋市、今日まで続けてこられたことは、非常に誇れることであり、これからも私たちみんなで守り続けなければなりません。私は船橋市にまっすぐ前を見ることが出来るあなた方が居ることを誇りに思います。そして、こんなに素晴らしいお子さんに育て上げられた親御様を物凄く尊敬し感謝しております。

先日ノーベル平和賞を日本被団協（日本原水爆被害者団体協議会）が受賞したというニュースがありました。

この受賞により、大きく核廃絶に目が行くのではないかと期待が高まり、非常に良い事だと思います。この受賞理由として『被団協をはじめとする被爆者代表の並々ならぬ努力は、核兵器使用のタブーの確立に大きく貢献した。』とあります。また、『いつの日か、被爆者は歴史の証人としてこの世から姿を消すだろう』ともあり、だから今受賞した、と書いてあります。

今我々が享受している平和は、幻想かもしれません。現在の世界は、未だに核を脅しとして使っている状況であり、その脅威は確実に増えています。

「まさか現代にそんなことが」などとは思わないで下さい。昭和20年8月6日、9日。まさか天からピカドンが落ちてくるとは誰が思ったでしょう。そして、今この瞬間にも核が落とされるのではないかと怯えている国が存在していることは確たる事実なのです。

核を廃絶させ、戦争の無い世界を目指しましょう。

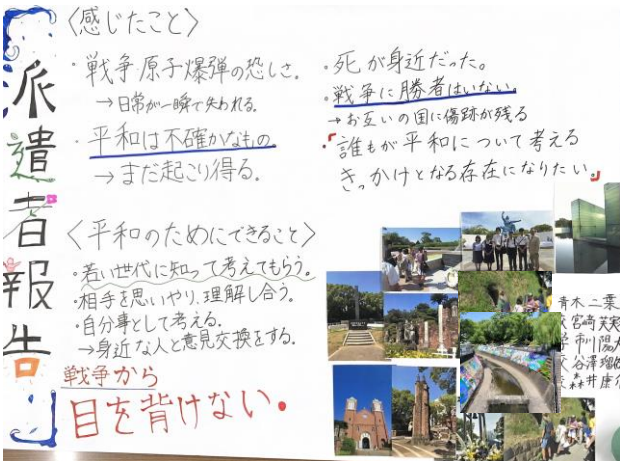


(令和6年8月9日 平和祈念式典 平和祈念像前にて)

《事前説明会の様子 令和6年7月24日》

	長崎市への派遣者計6名が初めて顔を合わせました。 派遣者の自己紹介や派遣への応募動機を発表してもらい、それぞれで役割分担を決めました。
---	---

《市長報告会の様子 令和6年8月29日》

	派遣者の一人ひとりから、現地で感じたこと、これから「平和の尊さ」を多くの人にそれぞれの立場で広めていきたいという決意などを市長に報告しました。 現地で学んできたことなど、市長からの質問を交えながら、平和について話し合いました。 報告会の後、派遣者同士で、今回の派遣事業を通し、具体的にどのようなことを伝えていきたいか話し合い、模造紙にまとめました。
--	---

《平和記念式典報告》

1. 概要

「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」は、毎年長崎県長崎市に原爆が投下された8月9日に、平和公園で行われる原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念する式典です。

長崎に原爆が投下された11時2分に原爆死没者に哀悼の意を表し、あわせて恒久平和の実現を祈り、1分間の黙とうをします。式典は原爆死没者の遺族をはじめ、世界中からの来賓、一般の方も参列し、長崎市長による平和宣言が行われます。

2. 式典の様子

今回の式典の前に、日本を除くG7各国の大使が参加しないこととなりました。世界に向けて核兵器廃絶、世界平和を願う重要な式典で、とても残念なことだと思いました。

それでも式典では長崎市長や被爆者の方々の切実なメッセージが発信され、平和の大切さ、戦争、核兵器の恐ろしさを世界に伝えるという強い信念を感じました。

式典参列者には外国の方なども多く、国や人種に関係なく平和への思いがあることを強く感じました。現地の学生の方が場内アナウンス、会場内ボランティア等で式典の運営をしていて、世代を超えてこの式典が大事なものであると考えられていることがわかりました。

厳かな雰囲気の中で、平和を望む気持ちが一層強くなりました。

3. 式典を通して学んだ事

平和祈念式典をテレビで見たことはありましたが、現地で実際に参加し、体験できたことは、大きな学びとなりました。

平和を求める心は、世界中どこでも同じです。長崎市長の平和宣言にあった、ひとりひとは微力であっても無力ではないという言葉が心に残りました。世界中の人々が、微力でも平和を求める心を持っていれば、必ずいつか核のない平和な世界が訪れると信じます。

長崎を最後の被爆地にする、という取り組みには終わりがありません。長崎が最後の被爆地であるには、これから先の時代、永遠に新しい原爆が落とされ

ないこと。全世界が一つになってそれを祈ることが必要です。

それには、時代を超えてこの長崎の記憶を語り継ぎ、平和を求める心を次の時代へと引き継いでいくことが必要です。私達には、その責任があるのだと強く思いました。

4. 次世代への継承

私達は、戦争の体験者、被爆者の方々から話を直接聞くことができる最後の世代かもしれません。

次の世代に原爆の記憶と、平和を求める心を伝えていくには、今回長崎に訪れ、実際に被爆者の方の生の声を聞き、その恐ろしさを学んだ私達が正確に伝えていかなくてはなりません。

世界の誰も戦争することを望んではいないはずですが、世界では戦争が絶えません。それでも私達は、戦争はいけない、原爆も無くならなければならない、それを強く信じて語っていくしかありません。

私達が語ることをやめない姿を見せていくことが、次の世代へと戦争や原爆の記憶を語り継いでいく鍵となっていくでしょう。

5. 感想

平和式典に出席して、世界には平和を求める気持ちを持つ人がこんなにいるんだと改めて感じることができました。

しかし、これだけいてもまだ足りないのです。なぜなら、毎年これだけの人が集まって式典を行っていても、戦争はまだなくなっていないからです。

平和について考えること、戦争が恐ろしく、無くなるべきものであることをより広める努力がまだ必要です。私達は、式典派遣を通してそれに気づくことができました。今度は、行動をする番だと思います。

戦争や紛争が無いことが当たり前の世界が来る日まで、平和の大切さを周りの人々に伝え続けようと思いました。

《令和6年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 式次第》

日時： 令和6年8月9日（木）10時45分 開式

場所： 平和公園平和祈念像前

10：45 開式

10：46 原爆死没者名奉安

10：48 式辞

10：52 献水

10：54 献花

11：02 黙とう

11：03 長崎平和宣言

11：12 平和への誓い

11：19 児童合唱

11：24 来賓挨拶

11：40 合唱 千羽鶴

11：45 閉式

《長崎平和宣言》

原爆を作る人々よ！
しばし手を休め 眼をとじ給え
昭和二十年八月九日！
あなた方が作った 原爆で
幾万の尊い生命が奪われ
家 財産が一瞬にして無に帰し
平和な家庭が破壊しつくされたのだ
残された者は
無から立ち上がらねばならぬ
血みどろな生活への苦しい道と
明日をも知れぬ” 原子病” の不安と
そして肉親を失った無限の悲しみが
いついつまでも尾をひいて行く

これは 23 歳で被爆し、原爆症と闘いながらも原爆の悲惨さを訴えた長崎の詩人・福田須磨子さんが綴った詩です。

家族や友人を失った深い悲しみ、体に残された傷跡、長い年月を経ても細胞を蝕み続け、様々な病気を引き起こす放射線による影響、被爆者であるが故の差別や生活苦。原爆は被爆直後だけでなく、生涯にわたり被爆者を苦しめています。

それでも被爆者は、「世界中の誰にも、二度と同じ体験をさせない」との強い決意で、苦難とともに生き抜いた自らの体験を語り続けているのです。

被爆から 79 年。私たち人類は、「核兵器を使ってはならない」という人道上の規範を守り抜いてきました。しかし、実際に戦場で使うことを想定した核兵器の開発や配備が進むなど、核戦力の増強は加速しています。

ロシアのウクライナ侵攻に終わりが見えず、中東での武力紛争の拡大が懸念される中、これまで守られてきた重要な規範が失われるかもしれない。私たちはそんな危機的な事態に直面しているのです。

福田さんは詩の最後で、こう呼びかけました。

原爆を作る人々よ！

今こそ ためらうことなく
手の中にある一切を放棄するのだ
そこに初めて 真の平和が生まれ
人間は人間として蘇ることが出来るのだ

核保有国と核の傘の下にいる国の指導者の皆さん。核兵器が存在するが故に、人類への脅威が一段と高まっている現実を直視し、核兵器廃絶に向け大きく舵を切るべきです。そのためにも被爆地を訪問し、被爆者の痛みと思いを一人の人間として、あなたの良心で受け止めてください。そしてどんなに険しくても、軍拡や威嚇を選ぶのではなく、対話と外交努力により平和的な解決への道を探ることを求めます。

唯一の戦争被爆国である日本の政府は、核兵器のない世界を真摯に追求する姿勢を示すべきです。そのためにも一日も早く、核兵器禁止条約に署名・批准することを求めます。そして、憲法の平和の理念を堅持するとともに、北東アジア非核兵器地帯構想など、緊迫度を増すこの地域の緊張緩和と軍縮に向け、リーダーシップを発揮することを求めます。

さらには、平均年齢が85歳を超えた被爆者への援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

世界中の皆さん、私たちは、地球という大きな一つのまちに住む「地球市民」です。

想像してください。今、世界で起こっているような紛争が激化し、核戦争が勃発するとどうなるのでしょうか。人命はもちろんのこと、地球環境にも壊滅的な打撃を与え、人類は存亡の危機に晒されてしまいます。

だからこそ、核兵器廃絶は、国際社会が目指す持続可能な開発目標（SDGs）の前提ともいえる「人類が生き残るための絶対条件」なのです。

ここ長崎でも、核兵器のない世界に向けて、若い世代を中心とした長年の動きがさらに活発になっています。今年5月には、若者版ダボス会議と呼ばれる国際会議「ワン・ヤング・ワールド」の平和をテーマとした分科会が、初めて長崎で開催されました。

世界の若い世代が主役となって連帯し、行動する輪が各地で広がっています。それは、持続可能な平和な未来を築くための希望の光です。

平和をつくる人々よ！

一人ひとりには微力であっても、無力ではありません。

私たち地球市民が声を上げ、力を合わせれば、今の難局を乗り越えることができる。国境や宗教、人種、性別、世代などの違いを超えて知恵を出し合い、つながり合えば、私たちは思い描く未来を実現することができる。長崎は、そう強く信じています。

原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の誠を捧げます。

長崎は、平和をつくる力になろうとする地球市民との連帯のもと、他者を尊重し、信頼を育み、話し合いで解決しようとする「平和の文化」を世界中に広めます。そして、長崎を最後の被爆地にするために、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けてたゆむことなく行動し続けることをここに宣言します。

2024 年（令和 6 年）8 月 9 日

長崎市長 鈴木 史朗

令和6年度

長崎市平和式典派遣者報告書

令和6年12月発行

船橋市総務部総務法制課

Tel 047-436-2122

e-mail shisomu@city.funabashi.lg.jp